

岩船町駅の思い出



開業百周年に寄せて

岩船駅前 山崎 與次

大正三年十一月一日、国鉄は村上まで開通させ、村上駅を開設して村上線としました。沿線には坂町駅、岩船町駅が開設されました。その後、大正十三年七月三十一日、山形県鼠ヶ関まで開通させ、羽越本線と命名されました。

岩船町駅周辺は、港町岩船町からの海産物、神納、西神納、平林平野からの農産物の集積地として倉庫群が建ち並び各農協事務所や丸通運送出張所などがありました。

戦時中は出征兵士を見送る駅、又、軍需物資を運ぶ駅でした。戦後は国土復興、食糧増産は国策で進められ、昭和天皇ご巡幸時に農民を励まされ神納米倉庫をご視察なられたのも駅前の地です。

毎日のように復興物資を積んで何本もの列車が煙を吐いてホームを発車していきました。農産物、海産物を運ぶ牛馬車が列をなして駅周辺の道路が混雑していたことが昨日の様に思い出されます。

昭和三十年前の駅周辺には数軒の家よりなく、この頃から岩船町駅付近の住民は「駅前」と呼ぶようになったと先人たちの言い伝えがあります。

先人の意思を語り継ぎ、さらなる百年に向け、皆さんの「力」で「岩船町駅」の発展をご祈念申し上げます。

岩船町駅からの思い出

岩船下浜町 磯部 幸雄

岩船町駅開業百周年おめでとうございます。私も昭和二十八年四月から駅前M会社に勤務して十三年、それから中条に勤務して三十年間、汽車と電車にお世話になり、色々思い出があります。

夏場は良いけれど、冬場は雪道で、今は舗装で防犯灯も付いていますが、除雪の無かった頃の通勤の厳しかったことが思い出に残っています。

昭和三十九年の新潟地震の時は、駅前農協倉庫から米俵の放出、又少し雨が降ると駅前の地盤が低く、道路が水浸しになることもありました。中条に行く時は、駅に一番に入らないと電車に乗り遅れるような気がしました。ホームに出て、日の出を拝んで、一日の無事を願って体操をしました。ストーブの時期になると、駅員さんが事務所に入れてくれて、お茶をご馳走になることもありました。

電車勤めの三十年間、四季の風景、又先輩、後輩、通勤、通学者との話も、思い出として大切にしています。

北新保山の松材が岩船町駅から都会へ

長松 岸 治 夫

戦時中、食糧増産のために新発田から兵隊さんが来て松を切ったのですが、終戦となり、松材は業者により岩船町駅に集積されました。私共子供達は、トラックに乗りたくて、学校から帰ると家人に内緒でサツマイモをポケットに入れて山へ行き、作業している人にやりました。

当時、トラックは木炭車でした。トラックのかまどにイモを入れて出発し、私共は荷台に積んだ松材を縛ったロープにつかまり駅へ行きました。駅での荷卸し中は、駅の待合室で、駅員さんがするレールのポイント切り替え作業や、汽車が来るごとに肩に丸い輪のような物を機関士とやり取りしている作業を見たりしていました。

汽車から降りてくる人は、大きな風呂敷を背負ったり、両手に下げたりしていました。食糧難の時代だったので、行商に行ってきたのでしょうか、にぎやかに降りてきました。松材の積み下ろしが終わると、作業員の人は待合室まで迎えに来てくれました。帰りはトラックの中に乗り、かまどから焼けたイモを取り出し、分け合いながら帰りました。家に帰ると家人に、「また行ってきたか」としかられました。

岩船町駅開業百周年に想う

岩船下浜町 匿名

昭和三十五年から四十年頃は、繁忙期盛り。通学、通勤の自転車預かり所が、三軒もあり、自転車の出し入れに大忙しの姿が思い出されます。平山さんの食堂（カキ氷屋）、本間タバコ屋さん（家庭用品の販売）、一平食堂さん（現在の「一平食堂」の前身の竹内さん）、日本通運取扱店の山一さん、団体では、JAの前身の西神納農業協同組合、農事放送の有線事業。反対側では岩船米の供出米受付、米出しでは、牛車、馬車が俵米を満載で、牛も馬も大汗で行列に並んで検査を待っていました。手伝う女衆も一日がかりでたくさん仕事をしている姿で賑わいを見せていました。

私の家では商売を営んでいた関係で、列車に積んでもらうため、大型の台秤で計り、料金を支払ったものです。当時の方に加藤さん、広瀬さん、工藤さんの荷姿は今と違ってむしろかぶりで送ったことを思い出します。

汽車は汽笛石炭口煙を吐きながら走り、それをもの珍しそうに見送ったものです。

岩船町駅 私の今・むかし

岩船下浜町 小嶋 アサ子

梅雨期に珍しい晴天となり、六月二十日、「新発田市阿賀北美術協会絵画展」へ出かける。岩船からタクシーを利用し、普通列車へ乗車予定。「ホームの階段に気をつけて」と運転手氏の忠告。無人駅の切符販売機に戸惑いながらも切符を購入する。百段近い階段は、休み休みと深呼吸の繰り返しで、高齢者や私のような心臓疾病者には無理だと実感する。

帰路は、一時間の予定で歩きと決めた。駅前の広い間口ガラス戸の旅籠屋は、耕作地と変わり、私の頭上には、完成した高架橋を車が通過していく。駅までの目標としていた小口川の分岐点の柳の木は、伐採されている。

漁師だった実家は、ハエナワ漁の鯛の餌、イソギンチャクを漁師仲間衆三人で、千葉まで運びに行く。父の手製のリュックで、海水まじりの泥のまんま、生かして運んでくる戦後の夜行列車の恐るべき体験。母は、神棚の供え餅を炉端で焼き、サツカリン味の甘さで食べさせてくれた。忘れられぬ味だ。母の精一杯の愛情だったのであろう。

時と共に、人も町なみも当然ながら変化する。岩船町駅百周年記念事業に、出会えた私の徳を嬉しく思う。母への土産話を楽しみにして。岩船町駅―私の今、昔です。

思い出の岩船町駅

南大平 大矢 美咲希

わたしはママの妹を迎えに、岩船町駅に行ってきました。中は受付みたいな所があって、いすがありました。

でも、ある日、お家に岩船町駅百周年というふうとうが来ていました。わたしは「えー」

と思いました。いつもきている岩船町駅が、こんなにも古いとは思いませんでした。

わたしのおばあちゃんが、「昔は駅員さんがキップを切っていたんだよ」と教えてくれました。

最後に、岩船町駅は昔とても盛り上がりつつあった駅なんだと思いつつ、この作文を書きました。

今では人も減り、無人駅になってしまいましたが、これからもたくさん人が乗る駅にしてほしいです。岩船町駅さん、百周年おめでとうございます。



岩船町駅

岩船上町 西坂 寛

昭和三十九年四月から三年間、芝商へ通うため岩船町駅を利用しました。自宅から駅まで自転車を通ったのですが、自転車を預かってくれる所が何軒もあり、朝の二番目の汽車の時間帯は駅にもぎやか、自転車置き場にもぎやかといった状況でした。

当時は、駅舎に駅員が何名かおられ、切符を売ったり改札でハサミを入れたりで、それは忙しそうに働いておられました。当時、上りの二番列車は蒸気機関車で、なんとなくのんびりしていて、駅に入ってきて出発するのも乗客の顔をながめながら出発していたように思います。僕達が遅れてきて、手を上げたら待っていてくれた時もありました。

今、時々岩船町駅を利用するのですが、当時の面影は全くなり、駅舎もごんまりとしていて、駅員もいなく、何かさみしいような気がします。これが時代の流れなのかと自分に言い聞かせておきます。

百年の間、たくさんの人々が利用したと思うと、とても感慨深いものがあります。百周年おめでとうございます。

思い一言

南田中 木村 喜代吉

昨年暮れ、故あって数十年ぶりに駅を訪ねた。時刻表を眺め、時計を覗き込む人、タクシーを降り、足早に駆け込む人…。無人化以前の懐かしい思い出も甦ってくる。窓越しにホームを眺めて「はっ」とした。赤茶けた石とコンクリートの一画、「ああ、あの頃のままだ」と感じた瞬間、思いは一挙に遡った。「兵隊送り」「勝って来るぞと勇ましく」、手柄たてずに死なうたか？」打ち振られる日の丸、機関車の吐き出す、もうもうたる煙と蒸気の中に消えた出征兵の姿。そして二度とこのホームに降り立つことのなかった方々も多いはずである。

様々な思いを秘めた地域の、故里の玄関口。そして尚移り行く時代を乗せた列車が、今日も行き交う。ようやく百周年…。八十歳を目前にした今、改めて思い念じつつ、つい一筆おじやまさせて頂いた。ありがとうございます。

無題

岩船上町 加藤 邦男

昭和三十六年六月四日、朝六時三十一分岩船町駅発の二番の汽車で新発田へ野菜を仕入れに出発。これが加藤商店が店を始めた第一歩です。私は二十二歳の髪フサフサの青年でした。

当時、岩船地区には自家用車を所有する事業所は数えるほどしかありませんでした。青果卸売市場も開設されてなく、又国道七号線も開通していませんでしたので、汽車による移動が最大の交通機関でした。大きな竹の籠を大きな風呂敷で包み、それを担ぎ、両手にダンボール二個分が車内に持ち込むことが出来る最大の量でした。約一時間位、俗にいう「担ぎ屋」を体験しました。その間、毎日のように岩船町駅を利用していただきました。その後、国道七号線が開通すると自家用車での運搬へと推移していきました。

岩船町駅というと、この時期のことがこの間のことのように思い出されます。

当時一緒だった諸先輩と当時の話をすることはありませんが、忘れられない思い出です。

岩船町駅ありがとう

有明 鈴木 睦子

駅から近くの小口川で生まれ育ち、西神納小学校、岩船中学校で学びました。県立村上高校への通学は岩船町駅から毎日朝七時十分の汽車でした。早く起きられない私は、母の作ってくれた弁当を持ち、乗り遅れないように急いで駅へ走り、汽車と競争した三年間でした。高校の担任教師に、「竹内さんは走るからね」と言われたが、毎日家と駅とを走っていた結果走れるようになったのだと思います。

岩船町駅は、私にとって学業、花嫁修業の洋裁学校へ通うためのありがたい駅でした。

当時は、大勢の駅員がいらっしゃいました。当時のことを思うと懐かしいです。ありがとうございました。



提供 里本庄 磯部 正貴 氏

先生、バナナ、小遣い内に入れるの

桃川 内山 興栄司

昔、マイカーがあまり普及していない頃、交通手段はバスか汽車だった。岩船町駅は、今は無人だが、昔はキップ売りときっぷ切りの頼りになるスーパーマンがいた。

窓口で、「豊栄まで、大人一人と小人一人」と言うと、「ハイ、二百八十円です」と言い板垣退助を二枚と八十円を払い、キップ切りの真面目そうな駅員に案内を聞き、汽車を待つ。子供心に汽車に乗るのが楽しみだった。そんな岩船町駅が小学校の頃、遠足の集合場所選ばれた。最も楽しみなのは、行き先で食べるお弁当とおやつだった。前から先生に、「おやつは百円分」と言われていた。

僕は、近所のお菓子屋で、「甘納豆とさきいかとえびせん」を買って、岩船町駅へチャリンコで出かけた。岩船町駅は、広く建物も立派で駅前にタクシーもあった。広場の中に桜か何かの立木があった。そこで、その事件は起こった。ワイワイガヤガヤ、しかし、集合時間になっても来ない人がいた。マユミちゃん、「先生、菅原さんが来てません」先生は、「ちよつと待ってみようか」と言った。それから三十分か一時間が過ぎて車が来た。「菅原君だ」車から降りた菅原君は、手に何かの包みを隠す様に持っていた。それを見て、すぐ皆気がついた。「バナナだ」そしてたつちゃんと言った。「先生、バナナは小遣い

に入りますか」先生は黙ってしまった。それからの悲劇は皆さんで想像してほしい。次の日、菅原君は休んだ。病欠だという事…。皆は、「バナナの精だ」と言っていた。
そんな岩船町駅さんへ、ありがとう、そしてこれからも宜しく。



提供 岩船駅前 工藤 辰義 氏

就職組の友を見送って

八日市 佐藤 アヤ子

岩船町駅開業百周年おめでとうございます。

昭和二十八年、中学卒が金の卵と言われていた頃、私の同級生も卒業式の一週間後に東京の機械工場に就職することになりました。

当時、岩船中学校は西神納との組合立で生徒数も多く、一組は就職組、二組は進学組、三組は漁業と商業組、四組は農業組に分かれていました。私の友人は就職組の一人でした。

岩船町駅、午後七時三十分発の夜行は上野駅に朝早く着くのだそうです。黒い煙を大きく吐いてゆつくりと車輪が動き出し、汽車が見えなくなるまで友人と手を振って、とても悲しい思いをしました。今、ときどき、新発田や新潟へ行く時、あのホームに立つと当時は懐かしく思い出します。

現在は、無人駅の良さも見直されました。岩船町駅もそのひとつです。そこで、駅前の自転車置き場をもう少し整備し、きれいにしてもらえたらと常々思っています。通勤の人や高校生が今もたくさん利用しています。利用する人達の思い出に残る、活気ある岩船町駅を関係者の皆様のお力で作っていただけたらと思います。

むかしのはなし

小口川 坂上 孝雄

五十年前、桜ヶ丘高校に毎日汽車で駅から通学していました。まだ車はほとんどなく、唯一が国鉄でした。物資、特に米は全部岩船町駅から関東方面に送られていました。駅前には商店や旅館、飲食店、運送屋などにぎわっていました。

小学校の頃は、駅前広場で一夜限りの映画もやっていました。今見れば、そんなに広い場所ではないけれど、馬車、牛車でにぎわっていました。ほんの半世紀でこんなに変わってしまいました。お金より米の時代でもあり、自給自足の時代。すべて自分の家でやって、燃料は薪柴炭など自分で山に行って取ってきました。水は井戸、川に洗濯、野菜、鶏、豚も自給、魚だけは煎餅屋さん。二町歩足らずの田んぼで十人家族が十分に生活できました。平均寿命が五十代の頃の話です。

今、駅は、無人になり利用のお客さんは昔の五分の一になってしまいました。

素晴らしい日本、良い時代に私が開業百周年のイベントに協力できることはなんと素晴らしいことでしょう。皆様に感謝を申し上げます。

岩船町駅の想い出

八日市 菅原正道

岩船町駅を思い出すのは、昭和四十七年から六十四年まで、岩船町駅から東新潟駅（旧操車場前）まで列車通勤していたことです。

朝、六時二十五分位に家を出て、最初は、自転車で、次はバイク、自動車と約一・六キロの岩船町停車場線を通いました。冬は家の前の除雪がまだされてなく、停車場線に入ると道路は凍結していて、自転車やバイクの時は足をペダルに乗せないで、両足を地面に軽くつけるようにバランスを取りながら恐る恐る運転して駅に着いたのを憶えています。

色々なことがありました。滑って自転車と体が堀を越え、田んぼに落下し、胸部を打つたこともありました。冬は列車が遅れ、家に到着したのは夜の十一時頃になったこともありました。ある時は、新発田駅で電車がストップになり、新発田で宿泊し、そのまま駅から職場へ行ったこともありました。

通勤でも、又、人生においても心が折れそうになった時、それを乗り越えられたのは、岩船町駅が生活のための架け橋であり、家族の支えもあったことを忘れることはできません。今の私が、今日まで強く生きてこられたのは、頑張ること、耐えることを教えてくれた岩船町駅への通勤だったのかもしれない。

無題

牧目 増田 トミ子

岩船町駅の開業百周年、おめでとうございます。素朴な駅舎や待合室、ホームにどこか懐かしさを感じ、趣がある駅は私のお気に入りです。

運転免許を持たない私は、電車に乗るために岩船町駅をよく利用していました。子供がまだ小さかった頃には、様々な所に出掛けたものです。車窓からの景色を眺めては目を輝かせてはしゃぐ子供と楽しい時間を過ごしたことが思い出されます。その子供も高校生の時には通学に、大人になってからは帰省に、そして今では孫が通学に岩船町駅を利用しています。

今は車社会で、いつでも好きな時自由に出掛けられますが、時には電車に揺られ、シートに座りのんびりとした時間を過ごすのも良いのではないかと思います。

これからも変わらずに、地域住民から愛される岩船町駅でありますよう、心より願っております。



提供 里本庄 磯部 正貴 氏

いつまでも岩船町駅

岩船上町 伴 田 美智子

昭和三十年代、岩船町駅から夢を乗せて都会へ行く人、また、祭りには必ず故郷へ帰ってくる人、ほとんどの人がこの駅を利用してきました。

当時の修学旅行もこの駅から普通列車に揺られて三泊四日の旅（一泊は車中泊）に出ました。しかもお米を持って…。

また、子供の頃、母の実家に連れて行ってもらったのが楽しみで、岩船町駅までの片道五十分の道のりを歩いて行ったのも今は懐かしい思い出です。

今は車や新幹線の時代、すっかり岩船町駅の存在を忘れかけていましたが、この度、「岩船町駅開業百周年」と聞いて、この事業に取り組まれた関係者の方に敬意を表し、この駅の存在を忘れずにいたいと思います。

岩船町駅とは言いますが、所在地は神林です。岩船中学校歌にある、「西神納と岩船は我が学び舎の守りなり」の歌詞を忘れないでいたいと思います。

思い出

小出 本間 ミキ

岩船町駅百周年おめでとうございます。

思い出と言えば、夫の舞鶴海兵団入団のため、岩船町駅に見送りに行った時のことを思い出します。

私は、大正十一生まれです。夫とは、昭和十九年五月二十五日に結婚し、夫は四ヶ月で海軍志願兵として舞鶴海兵団へ入団しました。

消防団は、笛や太鼓、ラッパの歓呼の声、婦人会のお母さん、お姉さん方は日の丸の旗もちぎれるように振って軍歌を歌い、村から岩船町駅まで、旗の行列の中、長い道のりを歩きました。

やがて岩船町駅に着き、広場で軍歌を歌っていると、汽車が来ました。夫は、急いで汽車に乗りました。夫は、窓から「ありがとうございました。元気で帰ってきます」とあいさつをし、ホームでは、はち切れるような「万歳、万歳」の音が響きました。汽車が見えなくなると、「万歳、万歳」の音が続きました。

汽車が見えなくなったので、私達は家へ帰りましたが、あの時の感激は、今もはっきりと覚えています。

これが長い七十年間の一番の思い出です。

百年

岩船縦新町 佐久間 成一

岩船町駅が開業した大正三年(一九一四年)の頃、我が家では海運業をしていました。その頃は二本マストの帆船で、動力エンジン積んだのは昭和十年代になってからでした。

そして、物流を鉄道や拡幅される七号線(羽州浜街道)にその座を明け渡すことになってゆく時代の昭和二十四年(一九四九年)に、岩船で最後の海運船、第五号『最勝丸』が進水しました。しばらくの間は、鉄道も国道も、それに続くアクセスの整備が十分ではなかったため、粟島、飛島、能登などへの運送を盛んにしていましたが、昭和三十七年(一九六二年)いよいよ退役し、売却され、粟島丸としてその最後を飾ったのでした。

私は子供の頃、「岩船町駅は、海運業の船主たちが仕事を奪われると考え、遠くへやった」というふうに関心されていたので、神林村誌の記述には少し戸惑いを感じましたが、村誌を編さんした方々の配慮に、子孫として感謝しています。

小学校の頃、家の手伝いで、貨車で運ばれてくる石炭や豆炭、練炭などを岩船町駅まで引き取りに行く手伝いを、幾度かした事を覚えています。九日市側の踏切には踏切番がいて、ハンドルを回して遮断機を上げ下ろししていました。駅前には旅館や自転車を預かるお店が有り、繁盛していました。多くの利用が、多くの携わる人があった岩船町駅ですが、今、往時を偲ぶもの

はほとんど見ることができません。昨年から神林の方々の尽力が有り、ここに開業百年を記念して石碑が建てられることを契機に、これからの百年に思いをさせてみたいと考えています。

なつかしい駅前の盆踊り

北新保 川崎 悌吉

昭和二十三年の夏、岩船町駅前の広場で盛大な盆踊りがあり、景品も沢山あったので仲間と一緒に参加した。

当時盆踊りは、男女社交の場であり、唯一の楽しみであった。三日市、八日市、有明からも大勢参加していた。

当時は終戦後で、何の娯楽もない貧困の時代。自転車もなく、学校へ通うには岩船町駅を利用する以外になく、徒歩、しかも下駄である。(平林駅は昭和二十七年頃出来た。)

岩船町駅前で踊った仲間は、今はあまりいない。

無題

有明 美濃 忠一

平成十二年頃、私の子供二人が新発田の高校に電車通学していた時に、岩船町駅近くに平山さんという老夫婦が、自転車小屋を管理して有料で預かってくれました。現在では建物も無くなりましたが、その当時は大変便利でした。

子供たちは部活に入っていたので、いつも遅い時間の電車になるのですが、いつも優しく接してくださるので、子供たちも嬉しくしていました。心からお礼申し上げます。

岩船町駅には、人と人をつなげる大切な役目があることに気づきました。これからも孫たちがお世話になるかもしれないので、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。



提供 里本庄 磯部 正貴 氏

無題

牧目 増田 トイ

岩船町駅には長い間お世話になりました。子供の高校の時、又は私が病院へ通うためにもお世話になりました。

ありがとうございました。

また、これからもよろしくお願いいたします。

子どもの頃の思い出

松沢 田中正三

昭和二十九年の春、神納村立中学三年生
修学旅行で東京に行ってきました。
岩船郡神納村松沢から岩船町駅まで
歩いて五キロの道のり行き帰り。

無題

志田平 内山秋善

岩船町駅、それは私にとって、とても思い出深い駅です。昭和四十三年三月二十八日、波乱に満ちた私の青春時代は、同級生数名に見送られてこの駅からスタートしました。当時、中学校を卒業したばかりの十五歳の少年が、遠く離れた仙台の地に就職が決まり、期待と不安でいっぱいの旅立ちでした。

亡き養父も、ご縁があつて数年の間、当駅で切符の販売や鉄道旅行などのお手伝いをさせていただきました。とても懐かしいです。



提供 志田平 内山秋善氏

遠足の思い出

松喜和 島田隆夫

小学生の時、遠足で新津・新潟へ汽車に乗るため、朝まだ暗いうちに田んぼ道を駅に向かって歩いて行ったことが、今でも時々懐かしく思い出されます。

無題

潟端 藤山 操

岩船町駅が開業百周年を迎えることを誇りに思っています。私の父も、三十年余りも岩船町駅に勤務しておりました。私も、岩船町駅を幾度利用した事か。

いつまでも岩船町駅が残ることを切に思っている今日この頃です。

岩船町駅を拠点とした運送屋

宮城県仙台市 本間 弘信

岩船町駅が出来たのが今から百年前と言えば、折しも、第一次世界大戦が始まった頃であろうか。その影響が「大正」となった日本に、ましてこの新潟県北の地のように出ていたのかはよくわからないが、わが祖先（曾祖父達）は、羽越線・岩船町駅ができるというので、「今までは海運（北前船）だったが、これからは陸運（鉄道輸送）」と考え、岩船の街から出て岩船町駅前に「山一」という運送屋を起業する。駅前に出てきたころの駅前集落はたったの三軒だけで、とても寂しかったとのこと。家から、南は九日市、西は新飯田・小口川が、そしてその先にお幕場方面の松林が直に見えた。

「山一」は、それまでは海産物の加工・卸売りを中心に生業を立てていたようだが、北海道の資産家（岩船出身の親戚筋）からの資金提供を得て、ようやく運送屋を開業できたと聞いている。曾祖父が資金提供をお願いしに北海道まで資産家を訪ねた折に、なかなか相手に面会できず、その心境を岩船で待つ家族宛に綴って送った手紙の一部が手元に残っている。何日も面会できず、その切ない思いを何通もの手紙に綴って送ったようだが、八・二八下越水害の折であろうか、軒先に触れんばかりの濁流に呑み込まれたようで、僅かに残った書類を丹念に探すが、他の手紙は出てこない。

運送屋「山一」は開業当初、岩船漁港に水揚げされた魚やその加工品を、漁港から岩船町駅まで大八車（人力もしくは牛馬で引く）で運んで貨車に積んだり、農協に集まるコメを中心とした農産物の貨車積みをやって、事業としては成立していたようである。その為に大勢の作業員も雇用していた。

そして満州事変から太平洋戦争開戦、やがて終戦。戦後の復興期には、国策として増産されたコ

メの出荷が活況を呈し、「山一」の景気も随分良かったようである。そうこうしている間に「山一」は日本通運の組織に組み込まれ、そしていつだったか、岩船町駅では貨物を取り扱わなくなり、運送屋「山一」は廃業となった。

岩船町駅と運命を共にした運送屋の話であるが、駅は現在無人駅となれども、毎日、大勢の通勤通学客を迎え、そして送り出している。



提供 宮城県仙台市 本間 弘信 氏



提供 新潟市 小川 清毅 氏 【大正 12 年岩船町駅にて駅員一同】



提供 八日市 板垣 正志 氏 【関東大震災（大正 12 年 9 月 1 日）の災害派遣として、岩船町駅から横浜へ出発する当時の岩船町青年団】



提供 新潟市 小川 清毅 氏 【昭和 55 年 9 月 30 日の岩船町駅】



提供 新潟市 小川 清毅 氏 【昭和 42 年 8 月 28 日羽越水害の岩船町駅構内】



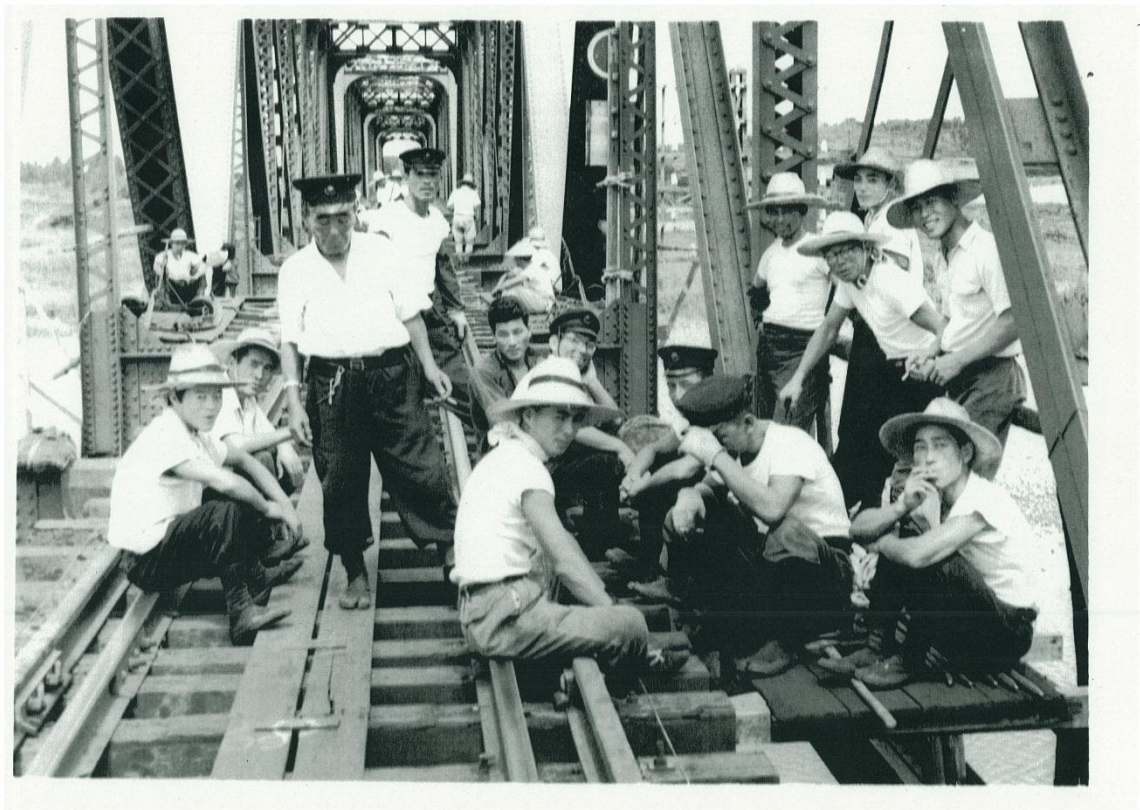
提供 新潟市 小川 清毅 氏 【昭和 42 年 8 月 28 日羽越水害の本間市弥宅】



提供 新潟市 小川 清毅 氏 【昭和 42 年 8 月 28 日羽越水害の一平食堂】



提供 葛籠山 齋藤 清一 氏 【岩船町駅保線区官舎前にて保線区社員一同】



提供 葛籠山 齋藤 清一 氏 【荒川鉄橋にて保線区社員が作業している合間のひととき】



提供 葛籠山 齋藤 清一 氏 【岩船町駅周辺にて作業する保線区社員】



提供 志田平 内山 秋善 氏 【昭和 50 年代はじめの岩船町駅駅員室（鉄道旅行社）】



提供 杉原 横山 千里 氏 【岩船町駅にて岩船町線路班】



提供 杉原 横山 千里 氏 【岩船町駅にて岩船町線路班】



提供 杉原 横山 千里 氏 【保線技術大会村上地区優勝記念写真】



提供 杉原 横山 千里 氏 【保線技術大会村上地区優勝記念写真】



提供 宮城県仙台市 本間 弘信 氏 【岩船町駅の線路上で駅員達と記念写真の祖父（前列左から2人目）運送屋「山一」を開業したころと思われる】



提供 宮城県仙台市 本間 弘信 氏 【昭和42年8月28日の羽越水害で水に浸かった岩船町駅（翌8月29日朝の状況と思われる）】



提供 岩船駅前 瀬賀電化センター 様 【昭和 59 年駅前集落の子ども達が駅構内でラジオ体操を行う前の集合写真】



提供 岩船駅前 瀬賀電化センター 様 【昭和 59 年駅前集落の子ども達が駅構内でラジオ体操を行っている様子】



提供 岩船駅前 瀬賀電化センター 様 【昭和 59 年駅前集落の子ども達が駅構内でラジオ体操を行っている様子】



提供 岩船駅前 瀬賀電化センター 様 【昭和 59 年駅前集落の子ども達が駅構内でラジオ体操を行っている様子】



提供 岩船駅前 瀬賀電化センター 様 【平成6年駅前集落の子ども達が駅構内でラジオ体操を行う前の集合写真】



提供 岩船駅前 瀬賀電化センター 様 【平成6年駅前集落の子ども達がラジオ体操後に駅構内の清掃活動を行っている様子（JRから感謝状を頂いた）】



提供 岩船駅前 工藤 辰義 氏 【岩船町駅にて父と弟の写真】



提供 岩船駅前 工藤 辰義 氏 【岩船町駅にて西神納小学校の児童が遠足に行く出発前の様子】



提供 岩船駅前 工藤 辰義 氏 【昭和 42 年 8 月 28 日羽越水害の岩船町駅周辺】



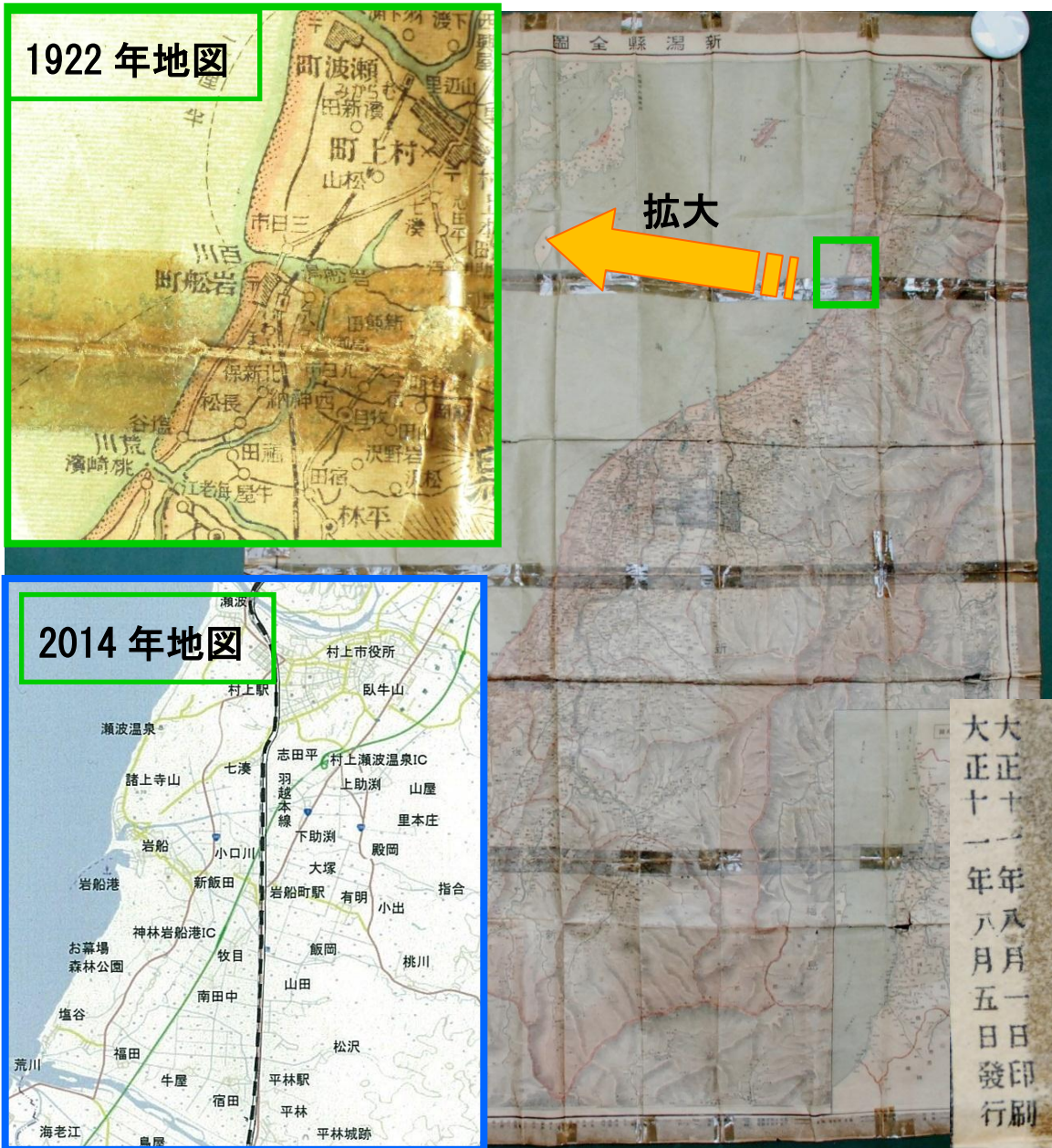
提供 高御堂 平山 高彌 氏 【蒸気機関車前にて】



提供 岩船駅前 工藤 辰義 氏 【岩船町駅にて父の写真】



提供 高御堂 平山 高彌 氏 【岩船町駅入口にて】



提供者 七湊 佐藤 錦吾 氏 【大正 11 年 8 月 発行 新潟県全図】



駅 その周辺 いわふねまち
岩船上大町

(羽越線)

新潟県の北部。国道7号、おけさ・おばこラインがわきを通り、田圃の中に昔の面影をそのまま残している。岩船港から粟島へ行く観光客と釣り人には、なくてはならない駅である。

陣谷 良造 37 (店員・新潟県村上市)

提供 岩船上大町 陣谷 良造 氏 【1979年6月1日毎日新聞の「読者の広場」に掲載された記事】